

地域医療に魅せられて

西野 徳之院長

利尻島国保中央病院



医師不足に悩む過疎地が少なくない本道では、「地域医療」と言えは、一大決心を取り組む、何か特別な医療のようなイメージが定着している。利尻島国保中央病院(四十八床)の西野徳之院長は、これを真向から否定した。

「地域医療に携わる医師を」とさら英雄視しないで下さい。取材に対して西野院長は何度も念を押した。地域医療は崇高なものではない、義務でもない。それは

自身が大きな魅力に満ちあふれているから取り組むのだという。
同病院は昭和六十年、利尻町と東利尻町(現在は財団法人・利尻富士町)による本道初の一部事務組合病院として開設。以来十年間、自治医科大学の卒業生が二年交代で勤務し、離島の医療を支えてきた。研修を積んだとはいえ、若手医師で構成する病院だけに、周囲も不安を抱かなかつた訳ではない。地域住民の信頼を得るにはむろん時間を要した。

しかし、長期的な視点で徐々に体制を整えてきた歴代院長、スタッフの努力が、果敢と云えるだろう。
「地域医療は継続されなければ意味がない。十年、

若い医師に地域医療の魅力を

継続されてこそ充実する医療 マニュアル作り後継者にバトン

医療に対する情熱を先輩から後輩に確実に継承した結果、十年を期に実施した患者意識調査では、八割以上から「医師、看護婦とも切さを強調する。



地域医療に携わるのは英雄だからでなく魅力あるから

「この九月には地域住民の主導で仮称・草の根医療フォーラムが発足することになった。「必要に応じて勉強会、講演会を開催し、住民側も自ら医療を学び、そこから生まれた疑問や要望を行政、病院に訴えていく(中川原潔彦氏)という。住民と病院との距離をより近づけるのが狙い。双方の力を合わせ、地域医療を充実させようという意気込みにあふれている。こうした住民との密接な結び付きも、地域医療ならではの魅力といえるだろう。
六月に着任した西野院長もいよいよ九月末で退職することになった。現在は「これだけやれば大丈夫」というぐらいのマニュアルを手付け、後任の小松英樹院長へのバトンタッチに控える。西野院長によれば、小松院長は既にいくつかの新しいプランを抱えているという。地域医療は継続されてこそ意味がある。

すべてが感動と発見

情熱にかられ南富良野に

「僕の人生にとって一番楽しい時は患者に接している瞬間なんです。だからこの医療現場が充実して、長いこと医療に従事でき、その時間が充実していれば、それだけで幸せなんです。医療そのものが自分の人生、地域医療はその縮図みたいなものと語る下田院長。

長崎の離島病院副院長から富良野市の山部厚生病院長としてやって来たのが昭和五十八年。地域の人口が減少し、病院経営が厳しくなっていた中で「患者が来ないから、こっから出掛けていった」と始めた訪問診療が一年、一年順調に拡大。そのうえ、心身症からリウマチ、アレルギー疾患

まで、鍼や漢方薬など下田院長の東洋医学的な治療を求めて旭川や帯広、札幌、稚内など全道から患者が訪れるようになった。

山部病院の経営内容は一変したものの、「診療圏外からの患者が来れば来るほど、風邪や腹痛などでの地元患者がどんどん富良野

市内に流れていってしまっただ。こういう医療が果たしてまともなのかと感じるようになってきました。
昨年十月、約三十キロ離れた南富良野町の幾寅診療所の医師が町を離れた。「無医地区をつくる訳にはない。直ぐさま、週二回の出張診療を買って出た。町にある特養ホームや知的障害者施設から訪れた患者、待合室から聞こえる子供たちの声。「すべてが感動と新しい発見だった。十余年の山部の診療を通して、専門医療と地域医療との境が見えなくなっていた時代に、心を駆り立てられたという。

今年七月から幾寅診療所長に。山部病院と一緒に訪問看護に取り組んできた看護婦、介護福祉士として札幌の医療機関で働いた長男も事務長としてスタッフに加わった。「ここでは一時間が必要な人は一時間使うような、せいたく診療をしていきますよ。診療が一段落く問もなく、自らハンドルを握って訪問診療へ。一旦診療所に戻ってまた、在宅の患者宅へ。午後七時を回ることもしばしば。早期往診もこなす。驚くような忙しさが、スタッフ全員「私たちが先



下田 憲所長

南富良野町立幾寅診療所



訪問診療に向かう下田院長

盛夏お見舞い

株式会社 **メディコ北海道**
代表取締役社長 **吉田 信**

札幌市中央区大通西六丁目
北海道医師会館三階
☎(011)232-1878

た健康啓蒙活動などを契機に、この九月には地域住民の主導で仮称・草の根医療

フォーラムが発足することになった。「必要に応じて勉強会、講演会を開催し、住民側も自ら医療を学び、そこから生まれた疑問や要望を行政、病院に訴えていく(中川原潔彦氏)という。住民と病院との距離をより近づけるのが狙い。双方の力を合わせ、地域医療を充実させようという意気込みにあふれている。こうした住民との密接な結び付きも、地域医療ならではの魅力といえるだろう。